

レビ記8章「祭司の任職」

1A 会衆の集まり 1-5

2A 装束の着用と油注ぎ 6-13

1B 水洗い後の着用 6-9

2B 幕屋のすべてのもの 10-13

3A いけにえ 14-36

1B 罪のきよめのささげ物 14-17

2B 全焼のいけにえ 18-21

3B 任職の雄羊 22-29

1C 右のもも 22-28

2C 胸肉 29-32

4B 任職の七日間 33-36

本文

レビ記8章を開いてください。私たちは、前回、祭司たちが、イスラエルの子らから受け取ったいけにえを、彼らが食べるということで、聖なるものにあずかるという話を聞きました。これで、1章から7章までに渡る、いけにえについての教えを、主は一通り、終えられました。

8章は、祭司の任職式が書かれています。アロンとその子らが、祭司としての務めを果たすのにあたって、主に任命されて、聖別されたその働きをしていきます。このことはすでに、主はモーセに対して、シナイ山の上で主から教えを受けていました。幕屋の設計とともに、祭司の装束と、祭司がその務め、奉仕を果たすことにあたって任命する、任職式について教えておられました。出エジプト記29章に書かれています。今、モーセは、その命じられたことを実行します。ですから、書かれている内容は繰り返しになるのですが、出エジプト記を学んでから時を経ていきますので、改めて、じっくりと見ていきたいと思えます。

新約時代には、聖霊が信じる者に降り注がれることによって、一人一人が祭司として任命されています。「Iペテ2:4-5 主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが神には選ばれた、尊い生ける石です。あなたがた自身も生ける石として霊の家に築き上げられ、神に喜ばれる霊のいけにえをイエス・キリストを通して献げる、聖なる祭司となります。」主にお仕えするとはどういうことなのか？ここの任職式を見ることによって、知っていききたいと思えます。

1A 会衆の集まり 1-5

¹ 主はモーセにこう告げられた。²「アロンと、彼とともにいるその子らを連れ、装束、注ぎの油、罪

のきよめのささげ物の雄牛、二匹の雄羊、種なしパンのかごを取り、³ 全会衆を会見の天幕の入り口に集めよ。」⁴ モーセは主が命じられたとおりにした。会衆は会見の天幕の入り口に集まった。⁵ モーセは会衆に言った。「これは、主が行うように命じられたことである。」

アロンその子ら、まずは装束を身に着けます。次に注ぎの油があてがわれます。それから、いけにえを献げます。そして、これらのことを、全会衆を集めて、彼らの前で執り行います。いわば、彼らが証人となって立っているのです。これは、神の前だけでなく、人の前で執り行うことによって、神のなされたことを確認するというものです。こうすることによって、主がなされた霊的なことが、人々の間でしっかりと留まることを意味します。キリスト者も、人々が証人として立って、それで水のバプテスマを受けます。聖霊のなされたことを、人々もその場において確認して、それで、その御霊の働きが固まるのです。そして、神にお仕えしていく中で、人々に神の恵みと祝福を分かち合っていく実質が可能になります。

テモテが、福音宣教者として、また監督として召されて、任命を受けた時も、多くの証人がいました。「Ⅰテモ 6:12 信仰の戦いを立派に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたはこのために召され、多くの証人たちの前で素晴らしい告白をしました。」その時に、御霊の賜物が与えられたようです。けれどもテモテは様々な困難の中で、少し委縮していたようです。それで、神の賜物を再び燃え立たせてください、と勧めています(Ⅱテモテ 2:6)。人々の前で、主の任命を追認することで、その任命の中に留まることができるのです。

それから、「主が命じられたとおりにした」という言葉が強調されています。8章から10章までの間に20回も出てきます。私たちの主に対する奉仕は、その忠実さにあります。主から何を言われているのか？それを聞き取って、従うのみです。ですから、私たちに必要なのはへりくだった心と、従順だけです。そうすれば、主ご自身が私たちの従順と共に働かれて、御霊の賜物を注がれます。

2A 装束の着用と油注ぎ 6-13

1B 水洗い後の着用 6-9

⁶ モーセはアロンとその子らを近づかせ、彼らを水で洗った。

これから装束をモーセが着せますが、その前に彼らを水で洗います。主にお仕えするにあたって、まず自分自身が、主からの洗いを受け取る必要がありますね。「Ⅰコリ 6:11 あなたがたのうちのあの人たちは、以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」と言いました。全身を水洗いするのと同じように、御霊の洗いを受けることによって初めて、聖なる者とされ、義と認められています。

イエス様が弟子たちの足を洗い、それで互いに仕えることを教えられた時に、主は、水によるきよめを教えられました。ペテロは、「全身を洗ってください。」と言ったら、イエス様は、「ヨハ 13:10 水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身がきよいのです。あなたがたはきよいのですが、皆がきよいわけではありません。」と言われました。全身が水の洗いで清められて、初めて、主が命じられたように互いに仕えることができます。

⁷そしてアロンに長服を着せ、飾り帯を締め、その上に青服をまとうせ、さらにその上にエポデを着せた。すなわち、エポデのあや織りの帯で締めて、彼にエポデを着せた。⁸次に、彼に胸当てを着け、その胸当てにウリムとトンミムを入れた。⁹また、彼の頭にかぶり物をかぶらせ、さらに、そのかぶり物の前面に金の札すなわち聖なる記章を付けた。主がモーセに命じられたとおりである。

アロン、すなわち大祭司として装束を身に着けました。これは、出エジプト記 28 章で詳しく主は説明しています。「出エジ 28:2 また、あなたの兄弟アロンのために、栄光と美を表す聖なる装束を作れ。」と主は言われましたが、その装束は聖なるものであり、栄光と美を表すものです。そこには、キリストご自身の輝きが現れています。ヘブル書 1 章 3 節に、「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れ」とあります、とあります。主ご自身の栄光と美には、父なる神の栄光と美が完全に現れています。

長服は、亜麻布で、市松模様でできていますが、白色です。白は、汚れのない清さを示しています。そして飾り帯を締めます。その上に青服をまとうせています。青は天を示していますね。主イエスは、天から来られた方で、この方に罪は見いだされませんでした。そして、その上にエポデを着けさせました。エポデは、両面のエプロンのような形をしています。前と後をつなげる肩当てもあり、そこには、イスラエルの十二部族の名が記されている石がはめ込まれています。エポデは、ちょうど聖所の幕と同じ作りで、「金色、青、紫、緋色の撚り糸、それに亜麻布」(出エ 28:5)で出て来ています。金は神の栄光、青は天、紫は王の色、そして緋色は流された血の色です。キリストご自身を示しています。

そして胸当てですが、そのエポデの上に、同じ材料で作ります。袋ができるように二つ折にします。そして、正面にはイスラエル十二部族の名が記された宝石が埋め込まれています。そして、その袋の中に、ウリムとトンミムを入れます。主のみこころを推し量る時に使われたのではないかとされています。そして、額には金の札です。そこに記章があり、主に民を覚えてもらうために血執り成している姿です。かぶり物は、亜麻布でできています。

このように、アロンはキリストご自身の栄光と美を身に着けています。聖なる神に仕え、人々に聖なることを示します。私たちが、キリストを身に着けるように召されていることを思い出してください。「ロマ 13:14 主イエス・キリストを着なさい。」この方の栄光と美を身に着けることで、私たちが

祭司としての務め、主にお仕えすることを全うできます。

2B 幕屋のすべてのもの 10-13

¹⁰ それから、モーセは注ぎの油を取って、幕屋とその中にあるすべてのものに油注ぎを行った。こうしてそれらを聖別した。¹¹ さらに、それを祭壇の上に七度振りまき、祭壇とそのすべての用具、また洗盤とその台の油注ぎを行い、それらを聖別した。¹² また、注ぎの油をアロンの頭に注いだ。こうして彼に油注ぎを行い、彼を聖別した。

油を、幕屋のあらゆるところに注ぎます。そして、祭司の主にお仕えする祭壇については、油を七度振りまきます。七は完全数です。そして、祭壇についての用具と、また手足を洗い、聖所に入るための洗盤も油注ぎます。さらに大祭司アロン自身にも注ぎます。これは「聖別」するためである、とありますが、用具と祭司がただ神だけのものとなり、この世にあるものと別たれるためです。聖なる神が臨まれるところは、このように聖め別たれている必要があります。

彼らが油注がれるのと同じように、私たちは聖霊の油注ぎを受けました。聖い御霊によって、私たちはこの世にいながら、この世に属する者ではなくなり、神に属する者となりました。あらゆるところに油を注いだように、私たちも生活のあらゆる場面で聖霊に満たされるように命じられています。聖霊による聖めがあることによって、私たちは初めて主にお仕えできるのです。ヨハネは第一の手紙で、反キリストとも呼んだ偽教師たちが、教会から離れて行ったことについて、残された信者たちにこう言いました。「2:20 あなたがたには聖なる方からの注ぎの油があるので、みな真理を知っています。」このようにして、聖霊の働きがあつてこそそのキリスト者生活です。

¹³ 次に、モーセはアロンの子らを連れて来て、彼らに長服を着せ、飾り帯を締め、ターバンを巻いた。主がモーセに命じられたとおりである。

大祭司と他の祭司との違いは、祭司たちは、長服と飾り帯、またターバンというかぶり物だけを身に着けます。

3A いけにえ 14-36

そして主に任じられるためには、いけにえにある神の憐れみを知ることです。

1B 罪のきよめのささげ物 14-17

¹⁴ それから彼は罪のきよめのささげ物の雄牛を近寄せた。そこで、アロンとその子らは、その罪のきよめのささげ物である雄牛の頭に手を置いた。¹⁵ それが屠られると、モーセはその血を取り、指でそれを祭壇の四隅の角に塗り、こうして祭壇から罪を除き、その残りの血を祭壇の土台に注いだ。このようにして祭壇のために宥めを行い、これを聖別した。¹⁶ そして、その内臓に付いている

脂肪すべてと肝臓の小葉、二つの腎臓とその脂肪が取り出されると、モーセはそれらを祭壇の上で焼いて煙にした。¹⁷ また、その雄牛の皮と肉と汚物は宿営の外で火で焼いた。主がモーセに命じられたとおりである。

祭司の務めを始めるため、聖別されるためには、何か良い行いをするのではないです。いや、むしろ、神の憐れみをよく知っているということです。初めに献げるいけにえは、「罪のきよめのささげ物」です。自らが罪人であるという強烈な自覚がないかぎり、他の人々の罪のためのいけにえを献げることはできません。「雄牛」を捧げなさいと主は命じられていますが、家畜の中でも最も高価な動物です。それだけ罪を私自身が犯した、という意識がなければならないのです。

ヘブル人への手紙 5 章に次のように書いてあります。「ヘブル 5:1-3 大祭司はみな、人々の中から選ばれ、人々のために神に仕えるように、すなわち、ささげ物といけにえを罪のために献げるように、任命されています。大祭司は自分自身も弱さを身にまとっているのです、無知で迷っている人々に優しく接することができます。また、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分のためにも、罪のゆえにささげ物を献げなければなりません。」この「思いやる」という行為は、自分自身がその罪を犯しかねない弱い存在だ、ということをよく知っているから、できることです。パウロが用いられたのも、その自覚があったからです。自分が以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者であった、ゆえに、「I テモ 1:15 「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた」ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」と告白しました。自分は今すぐにも滅びなければいけない存在なのに、神の憐れみを知って、ただただ主を畏れ敬っているからこそ、主にお仕えできます。

その手順は、すでに私たちは、罪のきよめのいけにえについての教え、4 章でじっくり見ました。まずは、牛の頭に手を置き、牛が自分の身代わりになるのを知ります。そして、屠られて、血を流しますが、それを青銅の祭壇の四隅の角に塗ります。角は、救いと力を示しますから、血潮が流されて、救いの力を得ることができます。そして、残りの血は祭壇の土台に流します。罪のためのいけにえは、角に血を塗ることで、清められるためだけに使われるからです。そして、神の豊かさを示している脂肪は、祭壇の上で焼きます。

それから、大事なものは皮と肉と汚物です。宿営の外で焼きます。それは、罪あるものとなったから、聖なる神のおられる宿営から引き離さないといけないからです。イエス様は、エルサレムの都から出たところで、ゴルゴダの丘で十字架につけられました。「ヘブル 13:12-13 それでイエスも、ご自分の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられました。ですから私たちは、イエスの辱めを身に負い、宿営の外に出て、みもとに行こうではありませんか。」こうして、主のなされたことを知って、そこに深い畏敬を持っている人が主にお仕えすることができます。

2B 全焼のいけにえ 18-21

¹⁸ 次に、彼は全焼のささげ物の雄羊を連れて来させた。アロンとその子らはその雄羊の頭に手を置いた。¹⁹ それ屠られると、モーセはその血を祭壇の側面に振りかけた。²⁰ さらに、その雄羊が各部に切り分けられると、モーセは、その頭とその切り分けたものと内臓の脂肪とを焼いて煙にした。²¹ それから、その内臓と足を水で洗うと、モーセはその雄羊を全部、祭壇の上で焼いて煙にした。これは芳ばしい香りとしての全焼のささげ物で、主への食物のささげ物であった。主がモーセに命じられたとおりである。

罪の清めがあって、それから全てを献げる全焼のいけにえを献げます。今度は、雄羊をいけにえにします。頭に手を置くところは同じですね。流される血は祭壇の側面に振りかけます。私たちが主に献げる時に、御子の血があてがわれて、それで献げることができます。「Iヨハ 1:7 もし私たちが、神が光の中におられるように、光の中を歩んでいるなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」

そして、その献げる姿が、主にとっては「芳ばしい香り」なのです。「ロマ 12:1 ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。」自分が、何ができるかという能力ではなく、自分の一切のことを主にゆだねる姿、おささげる姿です。

3B 任職の雄羊 22-29

そして任職式で特徴的なのは、任職のための特別ないけにえです。

1C 右のもも 22-28

²² 次に、彼はもう一匹の雄羊、すなわち任職のための雄羊を連れて来させた。アロンとその子らはその雄羊の頭に手を置いた。²³ それ屠られると、モーセはその血を取り、それをアロンの右の耳たぶと右手の親指と右足の親指に塗った。²⁴ さらに、モーセはアロンの子らを近づかせ、その血を彼らの右の耳たぶ、また右手の親指と右足の親指に塗った。モーセはその血の残りを祭壇の側面に振りかけた。

二匹の羊を用意しますが、一匹は全焼のいけにえでしたが、もう一匹がこちら、任職のためです。基本、交わりはいけにえなのですが、特徴的なのは、ここにある、血をアロンの右の耳、右手の親指、右足の親指に塗ることです。「右」は聖書では権威を表します。ここでは「血によって、それぞれの器官を聖別している」ということです。

祭司が聞いていることが、他の一般の人々が聞いている声と異なり、主の御声のみを聞くことができるようにという願いです。そして、親指に血をつけるのは、自分の働きがいつも主の行って

いることだけであるように、ということです。それから足の親指に血をつけるのは、「歩み」が聖別されるように、ということです。自分が歩んでいる道がはたして、主にかなったものなのだろうか？それを確かめながら歩む、ということです。

²⁵ それから彼はその脂肪、すなわち、あぶら尾、内臓に付いている脂肪すべて、肝臓の小葉、二つの腎臓とその脂肪、また右のもも肉を取った。²⁶ また主の前にある種なしパンのかごから、種なしの輪形パン一つと、油を混ぜた輪形パン一つと、薄焼きパン一つを取り、それをその脂肪と右のもも肉の上に置いた。²⁷ それから彼は、そのすべてをアロンの手のひらとその子らの手のひらに載せ、奉獻物として主の前で揺り動かした。²⁸ そしてモーセはそれらを彼らの手のひらから取り、祭壇の上で、全焼のささげ物とともに焼いて煙にした。これらは芳ばしい香りとしての任職のためのささげ物であり、主への食物のささげ物である。

ここの「任職」と訳されているのは、直訳は「満たす」という意味です。ここに、右のももを含めた、雄羊の部位が書かれていますね。右もも以外は、脂肪のついている部位ですね、ももと言えば、ヤコブが御使いから太腿の関節を外された後で、「創世 32:32 イスラエルの人々は今日まで、ももの関節の上の、腰の筋を食べない。ヤコブが、ももの関節、腰の筋を打たれたからである。」と関わるかもしれません。それらの部位と、ここにあるパンですが、これをアロンの手のひらと、その子らの手のひらに一杯に満たします。そして、これらを主の前で揺り動かすのですが、これは祭壇の向かって、前に動かし、また後ろに戻してくるという前後の動きをします。主にこれらを献げますということです。

一般のイスラエル人のための和解のいけにえは、胸と右ももは祭司のものとなります。けれども、任職式では右ももは、穀物のささげ物と共に祭壇の火の中に捧げます。そして、これらを主は芳ばしい香りとして受け入れてくださっていますが、祭司は主と楽しく交わることがその務めの一つです。私たちが神との平和の中で、神に感謝して、賛美を捧げること自体が、大きな務めであります。

2C 胸肉 29-32

²⁹ モーセはまた、その胸肉を取り、奉獻物として主の前で揺り動かした。これは任職のための雄羊のうちからモーセの受ける分となるもので、主がモーセに命じられたとおりである。³⁰ それから、モーセは注ぎの油と祭壇の上の血を取り、それをアロンとその装束、彼とともにいるその子らとその装束の上にかけた。こうしてアロンとその装束、彼とともにいるその子らとその装束を聖別した。³¹ モーセはアロンとその子らに言った。「会見の天幕の入り口で、その肉を煮なさい。そしてそこで、それを任職のささげ物のかごの中にあるパンと一緒に食べなさい。私が、アロンとその子らはそれを食べよ、と命じたとおりに。

胸肉のほうは、同じ奉獻物でも、後で煮て食べることができます。そしてパンの残りもいっしょに

食べます。食べることによって、神と交わるためです。そして、任職のいけにえにしかない特徴的なことは、再び、油と血を装束の上にかけますね。しかも、その血は祭壇の上にある血であり、主がいけにえを心よく受け取られている時のその血があてがわれます。主との交わりにおいて、その血があてがわれて、私たちは聖い者として歩めるのです。

4B 任職の七日間 33-36

³³ また、あなたがたの任職の期間が終了する日までの七日間は、会見の天幕の入り口から出てはならない。あなたがたを祭司職に任命するには七日を要するからである。³⁴ この日行ったように、主は、あなたがたが自分のために宥めを行うように命じられた。³⁵ あなたがたは会見の天幕の入り口で七日の間、昼も夜もとどまり、主への務めを果たさなければならない。自分たちが死ぬことのないようにするためである。私はそのように命じられたのである。」³⁶ アロンとその子らは、主がモーセを通して命じられたことすべてを行った。

任職式は七日間続きます。出エジプト記 29 章によると、その間、罪のためのいけにえを一日ごとに捧げます。その他、祭壇を清めるためのいけにえも献げます。主が完全に、祭壇がご自分のものとなるために、完全数である七日を費やします。そして、その間、彼ら自身も外に出るはいけません。このようにして、主が聖別をしてくださるのです。

私たちキリスト者は、キリストが成されたことで、そのただ一度のことで聖別されています。「ヘブル 10:12-14 キリストは、罪のために一つのいけにえを献げた後、永遠に神の右の座に着き、あとは、敵がご自分の足台とされるのを待っておられます。なぜなら、キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって永遠に完成されたからです。」このことにより、私たちは聖なる祭司として、主の前で仕えることができます。そして、主の裂かれた肉を、パンを取って食べて覚え、主の流された血を、杯を飲むことによって覚えて、それで初めて、主との交わりができ、主にお仕えすることができます。

礼拝者、しかも聖餐にあずかっているような礼拝者でなければ、主に対して聖なる者としてお仕えることはできない、とも言えます。自分よがりの信仰では、主に仕えることはできないのです。